

「人間中心のソフトウェア開発」(「偏見」のソフトウェア観)

三田守久
(2009.6.17)

(1)「ソフトウェア技術者」という分類

いま「ソフトウェア技術者」と呼ばれているひとびとは、ほんとうに「技術者」と呼べるか?「技能者」とは言えるかも。それだからどうということでもないが、...

(2)「ソフトウェア技術者」はどのくらいいるのか?

「技術者」なら「技術」を論ずるのであろう。だがそれを論ずるひとは非常に少ない。100人に一人?いや1,000人に一人?だとすると、数十万人の「ソフトウェア技術者」がいると言われてい
るのだから、ほんとうに「技術」を論ずるひとは、数1,000人か、数100人しかいないことにな
る。

(3)ソフトウェアプロジェクトの管理

ソフトウェアプロジェクトの管理は容易ではない。技術管理も、配員管理も、スケジュール管理
も、品質管理も、コスト管理もすべてこなさなくてはならない。それらを(ひとりで)できるひと
がそれほどいるとは思えない。数1,000人か数100人しかいない技術者のなかでそれらをこな
せる人はどのくらい?数%か?ということになると仮に10%としても数100人か数10人、とい
うことになる。もっとも優秀な技術者がマネジメントも兼務する、と仮定しての話だが、...。これ
を切り分ける(べつべつの担当者を設定する)と話がべつになるが、それは、じつはもっと危険性
が増す(と思う・・・偏見)。ソフトウェアのしごと、というのはそういう類いのしごとである。

(4)ソフトウェアプロジェクトの数はどのくらいあるのか?

多分、日本で動いているプロジェクトは数1,000というほどには少なくはないだろう。仮に数
1,000だとしても、プロジェクトを適切に運営できる確率は10%とか1%に過ぎないことになる。

(5)ソフトウェアプロジェクトの成功/不成功

以上のようなことから考えると、プロジェクトが成功裡に終了するというのは現実的には「奇跡」
としか思えない。つまり大半のプロジェクトはなんらか失敗するか、しているに違いない。

(6)ではどうすればいいのか。

要するに、ソフトウェアプロジェクトが成功裡に終了することが当たり前という感覚を捨てるこ
とから始めねばならない。すべてはそこからだ。当面の手では、ソフトウェアプロジェクト数を
コントロール可能な範囲にとどめること、もう一点は、マネジメントをさせていけない人材にマネ
ジメントをさせないこと、の二点か。(あつかえる大きさに切り分ける、というのはべつの問題)

ソフトウェアプロジェクトは<-100点>を<0点>と考えるべき!!!